

BOOK Review

ケアする人のためのプロジェクトデザイン 地域で「何かしたい！」と思ったら読む本



評者 佐々木 淳 医療法人社団悠翔会理事長・診療部長

在宅医は「生活を支える医療」を行っていると自任している。しかし、実は全然生活を支えてなんていない。

在宅医にできるのは、せいぜい看護・介護職の人たちの仕事を邪魔しないことくらいだ。しかし、その看護や介護にしても生活の全てを支えられるわけではない。

「日々の暮らし」の中で、医療保険や介護保険の公的サービスで支えられる部分なんて、実はごくわずか。要介護高齢者の場合、そうでないように見えるのは、それ以外の暮らしを最初から諦めさせているから。そんなことに気が付いてしまった専門職の方々は少なくないはず。

高齢者福祉の目的は「生活・人生の継続」。どのような生活・人生を送るのか、それは本人が選択すべきだ。そして、その生活の支援に当たっては、本人の強みが発揮できることが重要である。これが1970年代にデンマークで提唱された高齢者福祉政策の三原則だ。

しかし、日本の公的サービスの多くは、その人の「弱み」を補完し、その人が事故を起こさないよう生活を管理し、支援者の都合によって人生の最終段階を過ごす場所や治療方針が選択される。

納得できる人生を最期まで生き切る。そのために必要なのは、その人の生命・生活・人生を医学モデルで支配することではない。その人の望む生き方を実現するための環境を整えることである。これがICF・生活モデルの考え方だ。

高齢者医療や介護には、衰弱していくその人の心身の機能を最適にケアすることが求められる。しかし、これだけでは、その人を「生かす」ことで終わってしまう。大切なのは、その人が「生きる」こと。そのために必要なのは、栄養やリハビリテーションや薬ではない。人と人とのつながり、つながりの中に自然発生的に生まれる居場所や役割、そしてそこに心の支えや生きがいを見出せること。そして、そこまでできて初めて、その人のニーズを満たすことができるのではないと思う。

しかし、専門職が専門性を磨けば磨くほど、生活モデルを実装するのは難しくなっていく。まじめに仕事をしようとすればするほど、その人を、その人の生活空間の中に閉じ込め、地域とのつながりをおろそかにしてしまう。

その人の「病気・障害」の専門家から、「その人」そのものへ、そして「その人の生活」へ、さらに「その人の暮らす地域」へ、少しずつ視座を上げていく。

「その人の生活」まではなんとか関われる。しかし、「その人の暮らす地域」までコミットするのは容易ではない。

どうすればいいのか？

何ができるのか？

そもそも自分たち専門職にできるのか？

しかし、ICF・生活モデルを突き詰めていくと、どうしても、この「地域の壁」にぶち当たる。いや、そもそもこれは壁なのか？ 壁だとすれば、それは誰が作っているのか？

行政？ 地域住民？ それとも自分たちの意識？

そんなこんなでもややもしている在宅医療・介護にかかわる方々へ。まずはこの本を読んでみたらどうだろう。

読み進めていくと、これまで「壁」だと思っていたものが、大きなキャンバスに見えてくる。プラスチックワードの一つにすぎなかった「地域づくり」が、多種多様なイメージとなって、頭の中にどんどん広がっていく。ワクワクしてきて、頭に浮かんできたあのひと、1秒でも早く動き出したいくなる。誰もが心のどこかに隠し持っているアイデアを実現化するための「地図」と言ってもいいかもしれない。

自分たちがコミットしたい地域はどこか。その地域で、まずは点と点をゆるやかにつないでいく。柔軟性のある結び目が、しなやかな協働・共生のプラットフォームとなって、そしていろんな人たちが、そのプロセスを楽しみながら地域のつながりを多層化していく……。

本書の誘惑に、多動な僕はもうじっとしていられなくなっている。

西上 ありさ 著

A5版／104頁／2021年／定価2,750円（本体2,500円＋税10%）／ISBN978-4-260-04900-9／医学書院刊